

野口芳子著『卒論を楽しもう——グリム童話で書く人文科学系卒論——』

(武庫川女子大学出版部、2012年3月刊)

谷口秀子
(九州大学)

野口芳子著『卒論を楽しもう——グリム童話で書く人文科学系卒論——』(2012)は、刺激的な本である。本書は、著者が長年実践している武庫川女子大学におけるグリム童話を研究対象とした卒業論文の作成指導の内容をもとに、文学をはじめとする人文科学の分野において卒業論文を執筆しようとする学生およびそのような学生を指導する教員を対象に書かれた、卒業論文作成のためのすぐれた指南書である。加えて、本書は、グリム童話研究およびジェンダー研究の啓蒙書としてもきわめて魅力的である。

本書の特色のひとつは、野口ゼミの学生たちのグリム童話を題材にした卒業論文が、論文の書き方のポイントを説明する際の具体例として多数引用されていることである。著者は、ゼミ生による多数の卒業論文を例にあげながら、研究テーマの選択とその扱い方、論文の構成と序論・本論・結論の書き方、考察の展開法、注や参考文献の書き方、校正の方法などについて、詳しく説明を行っている。

また、本書の後半の部分では、実際の卒業論文の要旨が多数紹介されており、バラエティ豊かな各論文の全体像をつかむことができる。紹介された多数の論文概要に対しては、著者の講評と解説が付されており、グリム研究者である著者による解説は、卒業論文で扱われたテーマをさらに深化させ、グリム童話やその社会的文化的背景に対して我々が抱いている固定観念を覆し新しい視点を提供してくれる。

最終章においては、過去の卒業論文で用いられた参考文献のうち使用頻度の高いものとして、347冊にもおよぶ文献リストが記載されており、まさに圧巻である。参考文献は、グリム童話に関するものの他、神話・伝説、民俗・風習・民間信仰、法律・裁判、魔術・妖術、ジェンダー・家族・結婚、キリスト教・宗教、服飾、色彩、身体、動物、植物、食材、天文・星、死生観、文化史に関するものなど多岐にわたり、著者の指導のもとにゼミ生が執筆した卒業論文がいかに広い視野を持って書かれたものであるかを、雄弁に物語っている。

このような参考文献の多様さは、本書においても表明されている著者の研究姿勢を反映したものに他ならない。著者は、文学を題材とした研究においても、作品内在的解釈や主観的見解にとどまらず、徹底的なデータの収集・分析にもとづいて客観性と論理的説得力のある論考を行うこと、そして、社会的歴史的な視点から考察を行うことを重視している。そして、このデータにもとづく客観的な論理構築と社会的歴史的考察という研究のスタンスは、本書で紹介されている多数の卒業論文の一編一編の中にも明らかに見て取ることができる。

本書のさらなる特色として、本書が、文学作品を題材とした研究にジェンダー学的視座を導入する方法をわかりやすく提示していることがあげられる。この方法論にもとづく論文指導の成果

は、結婚、性役割、男女のジェンダーのダブルスタンダード、女性・男性の描かれ方などのジェンダーに関わるテーマが、本書で紹介された卒業論文の多くで扱われ、明快な結論に至っていることから明らかである。学生たちは、グリム童話について自らが抱いた興味や違和感や疑問といった問題意識を出発点として研究を行うことにより、グリム童話に見られる社会的文化的価値観が現代の価値観といかに異なっているかを認識し、自分たちが今まで信じていた固定観念や価値観は普遍的なものではなく、「価値観とは時代によって社会によって変わるものであり、変更可能なものなのだ」(p.6)という視点を獲得していく。グリム童話という伝承文学の研究を通して固定観念を覆し価値観を相対化する試みは、学生たちを「女らしさ」「男らしさ」などの、時代や社会の期待を反映した固定的な性役割やジェンダーへの挑戦に向かわせる。学生たちは、グリム童話におけるジェンダーの問題に取り組むうちに、それがいかに社会的文化的そして時代的地域的に作り上げられたものであるかを明らかにし、因襲的な固定観念を転覆させていくのである。

さらに、本書において紹介されているグリム童話を題材とした卒業論文指導は、学生のエンパワメントにも大きく寄与しているように思われる。著者は、冒頭で、グリム童話を研究する意義のひとつとして、「自分自身の価値観を相対化して物事を客観視する能力が身につく」(p.6)ことをあげるが、自分で問題を見つけ、テキストを精読し、テーマに応じた対照表を作り、幅広い分野の多くの資料にあたり、説得力のある結論を出すという緻密で根気のいるしかし知的好奇心を沸き立たせるような作業が、学生たちの分析力や考察力を高め、「人生において非常に有用な能力」すなわち「価値観の確立に寄与する大切な能力」(p.6)を身につけることを可能にし、そのことが学生たちのエンパワメントにつながることは想像に難くない。また、卒業研究を通して獲得したジェンダー学の視点は、ジェンダーにとらわれない生き方や男女の両方にとって暮らしやすい社会の実現へと学生たちの目を向けさせることが期待できよう。

本書は、文学をはじめとする人文科学の多くの分野の卒業論文の執筆を目指す学生とその指導教員にとって大変有益な本であると同時に、ジェンダーとは何か、真実とは何か、文学研究とは何かなど、多くの示唆を与えてくれる貴重な一冊である。